

佳作

三十八億年前からの命のリレー

徳島県 徳島文理小学校五年 高尾航二郎

ぼくは、祖父がきとくになったことをきっかけに、「死んだらどこに行くのか」、「そもそもぼくは生まれる前はどこにいたのか」ということを考えるようになりました。自分が知らない世界を考えることは恐いことです。そして、世界の戦争のニュースなどを見ると、自分の存在の小ささにおしつぶされそうな気持ちになることもあるし、逆に、広い世界に出ていく自分を想像して楽しむこともあります。一体自分の頭の中で自由自在に大きさを換えられるぼくという存在とは何なのだろうと思ったら、疑問でいっぱいになりました。

人が死んだ後に行く世界については分からないけれど、人が生まれる前がどうだったかについては、色々な研究者によって説明され、本もたくさん出版されています。

です。「ぼく」は、三十八億年も前から、たくさん生き物によって命をつなげられ、進化してきたからこそ、今のようにな「ぼく」という姿で、ここにいるのです。そして「ぼく」も進化しながら、次の世代に命をつなげる役割をもっているのだとわかりました。

「ぼく」という存在は、ちっぽけだけれど「ぼく」がいなければ止まってしまう進化もあるのです。「ぼく」は地球上の生き物の進化に必要な存在なのです。ぼくは、ぼくの命を次の世代につなぐまで、ぼくの命を大切に生きようと強く思いました。

何十万年か後、ぼくの子孫は、たくさん進化をして今の人間とはかけはなれた姿になっているかもしれません。それを想像するのはとても楽しいです。ぼくの命は三十八億年前から続いてきた命のバトンリレーなのです。

今回、ぼくが出会ったこの本によると、地球上に生命が存在したのは約三十八億年前の話です。そして、原核生物から海綿動物、刺胞動物、無がく類、四肢動物、単弓類と進化してきて、やっと二億千万年前にぼくの祖先である「ほにゅう類」が登場するのですが、そこからさらに、現在のような人間「ホモ・サピエンス」になったのは、たった三十万から二十万年前の話なのです。あまりの年月の長さに、ぼくは頭がくらくらするようでした。その上、まさか、ぼくの祖先が人とはあまりにも形の違う、海中の生物や、は虫類のような形をしていたなんて、心の底からおどろきました。

想像もできないような長い年月の中で、なぜ、生き物が姿を変えてきたのかというと、それが「進化」なのです。生き物は、その環境に合わせて、どんどん体のしくみを変えて生命を次の世代につなげてきたのです。その中で、適応できないものが「絶滅」していくのです。

ぼくは、ぼくの身の周りの生き物全てが、自分と大昔、同じ祖先だったのだと思ったら、世界の見え方が変わったような気がしました。

この地球上に「ぼく」という存在は、たった一人